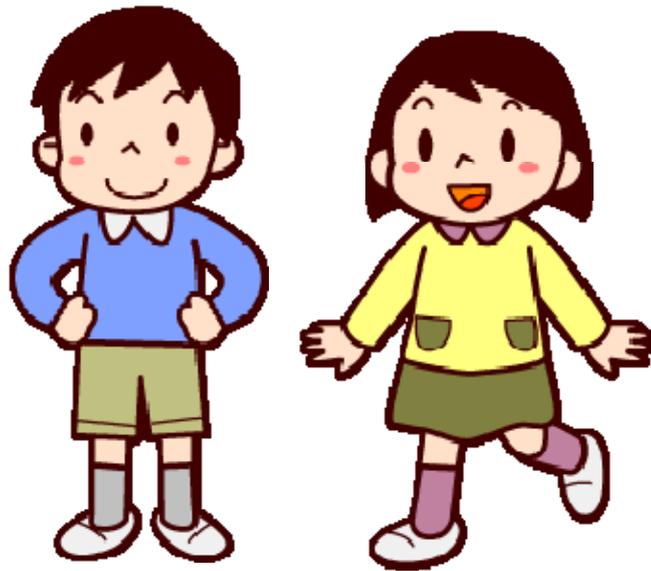


規範意識を育む ほめ方・叱り方



もくじ

《ほめ方》

○ほめ方 三つのポイント	1
○ほめて信頼関係をつくる 心を込めてほめることができる先生に	2
○ほめて規範意識を育てる 「当たり前」を続けられることが素晴らしい!	3
○ほめて規範意識を高める 規範意識を高めるためには	7
◇より効果的にほめるために	8

《叱り方》

○叱り方 三つのポイント	13
○叱って信頼関係を深める 信頼関係ができるまで叱ってはいけないの?	13
○叱って規範意識を育てる 「なぜ叱るのか」が子どもたちに伝わるように	15
○叱って規範意識を高める 活発な係活動が所属感や責任感を高める	18
◇より効果的に叱るために	20
□「ほめる」「叱る」のバランスをとって	24

規範意識を育むほめ方・叱り方

規範意識を育てていくためには、教師の子どもへの関わり方が重要になってきます。教師からほめられたり、叱られたりすることで、子どもたちは行動の規準を学び、自分の行動を改めたり、よりよくなりたいという意欲をもったりすることができます。

また、子どもたちと信頼関係を結んでいくために、教師の「ほめ方」「叱り方」は大切な要素となります。叱り方を一つ間違えただけで、子どもとの信頼関係を崩してしまうこともあります。そのため、子どもたちの様子をよく観察し、子どもの意欲が高まるように声かけをしていくことが大切になります。適切にほめたり、叱ったりすることで、子どもたちとの信頼関係を築くことができます。その信頼関係の中で、教師の示す規範やクラスの規範を守ろうという意欲につながっていくのではないのでしょうか。

【ほめ方 三つのポイント】

「なぜ、ほめるのか」という問いに対して、やはり「子どもの成長をうながすため」という答えが多いのではないのでしょうか。「子どもの成長をうながす」ようにほめるためには、下記に示す三つのポイントが大切です。

- ① 何がよかったか具体的にほめる
- ② 結果だけでなく、その過程もほめる
- ③ ほめることによって子どもを動かそうとするのではなく、感動を伝える

①何がよかったか具体的にほめることは、子どもたちに今後、どのような行動をしたらよいかを示すことにつながります。例えば、掃除の後、「よくできたね。」という言葉だけでは、何が、どのようにできたのかわかりません。「隅々までしっかりと箒ではけているね。」「机をきちんと整列して並べてあるね。」と、よくできたところを具体的にほめることで、本人も周りで聞いている子どもも、次がんばることを意識することができるようになります。

②結果だけでなく、その過程をほめることは、子どもの意欲を引き出すことにつながります。結果だけをほめられる経験を繰り返していくと、「結果」にしか目が向かない子どもになってしまいます。学年があがるにつれ、難しいことが増えると、いつも結果が出るとは限りません。結果がどうかということよりも、努力した過程を評価し、目標に向かっていこうという意欲をもたせることの方が、大切ではないのでしょうか。また、その努力を他の子どもに紹介することで、お互いが、様々な良さに気づき、認め合うようになり、子どもたちの人間関係がよくなることにもつながります。

③ほめることによって子どもを動かそうとするのではなく、感動を伝えることによって、子どもの心に届きやすいほめ方になります。子どもを動かそうとするために、ほめることがあります。これも教師のスキルの一つだと思いますが、それだけでほめると、うわべだけでほめることが多くなり、かえって信頼関係を浅いものにしてしまうこともあります。子どもの心に響かせ、深い信頼関係をつくるためには、「教室がぴかぴかになって気持ちがいいね。」など、簡単な言葉でもよいので、感動したことを率直に伝えることが大切です。

【ほめて信頼関係をつくる】

どのような言葉かけも、教師と子どもの信頼関係がなければ、子どもの心に届くものにはなりません。小学校の場合、教師の人間的な魅力が信頼関係を築いていく上で重要になります。笑顔を手がけて、子どもたちの良さをどんどん見つけ、ほめていくことで、子どもとの距離を縮めていきたいものです。4月は、学年も担任も新しくなり、子どもたちも緊張感をもって学習に取り組み、生活を送ります。また、担任によいところを見てもらいたいという思いも強くもっているでしょう。この初めの1ヶ月に積極的にほめ、信頼関係を築くことが大切です。

小さなことでもどんどんほめていくことが大切ですが、形式的なほめ方になると子どもたちを逆に興ざめしてしまう結果にもなります。ほめ方の三つのポイントを考えながらほめていくことが必要です。一つめは、「よかったね、すごいね。」という言葉だけでなく、何がよかったのか、何がすごいのかということがわかるようほめることが大切です。二つめは、子どもたちが何に関心を持ち、がんばろうとしているのかをよく見取り、その姿をほめるということに気をつけます。三つめとして、子どもの行為をほめるのではなく、教師がその行為についてどう思ったのかを伝えるなど、評価するほめ方だけでなく、教師の率直な思いや感動を伝えていくことも大切だと思います。

- ・ 具体的にほめる。



端から端まで、ていねいに雑巾がけをすることができていましたね。



漢字を書くときに、止め、はね、はらいに気をつけて、ていねいに書くことができています。これからもっと字を書くことが上達しそうですね。

- ・ 過程をほめる。



係活動の発表をするまで、中間休みに練習をしたり、準備をしたり、大変だったと思うけれど、最後まで、自分たちの力でよくできましたね。



学芸会よくがんばりました。今まで、つらいことや嫌だなと思うこともあったと思いますが、友だち同士でよく励まし合ってやってくれましたね。

- ・ 感動を伝える。



〇〇君のがんばりを見ていると、先生もがんばろうという気持ちになりました。



低学年の子たちにやさしく接しているみんなのにこやかな顔を見ていると、先生も温かい気持ちになりました。

心を込めてほめることができる先生に

たくさん「ほめる」ことができるということは、それだけ子どものことをよく見ているということです。ほめられることで、子どもたちは、「先生は自分の事を見てくれている」という安心感を得ることができます。それが先生に対する信頼感へとつながっていくのではないのでしょうか。

いろいろなほめ方があり、技術的なことも学ぶ必要はあると思いますが、心を込めてほめようという思いがなければ、技術が生きてくることはないでしょう。

【ほめて規範意識を育てる】

具体的にどう行動してよいかわからない子どもや、その規範そのものがわかっていない子どもに対して、具体的にほめること、または、他の子どもがほめられている様子を見せることは、どう行動したらよいのかという規範を示すことにつながります。したがって、周りで見ている子がいるということ意識しながらほめることも重要になるでしょう。

規範に対してできているときは、見逃さず積極的にほめていくことが大切です。いつでもほめる基準を一定にしておくことで、子どもは、「こういう行動をしたときにほめられるのだな。」と感ずることができるようになります。ほめる基準を一定にしておくことで、きまりを明文化する必要がなく、学級の雰囲気としてその規範が根づいていきます。

1. 「きまりやルール」が守れたとき

きまりやルールは、集団生活を円滑にしていくために必要なものです。意識して守っていかなければなりません。学級で明文化しているきまりやルールについては、常に意識して、守れていればほめていくことが大切になります。ルールはつくったが、その後、守れているか、守れていないかについて何もふれなければ、ルールはなし崩しになってしまいます。それどころか、他のルールにも影響するおそれが出てきます。できていればしっかりとほめていくことが必要になるでしょう。

◆学習規律

- ・授業の始めに「気をつけるポイント」を示し、終わりに評価する。そして、できていたらほめる。
- ・基準を示してほめる。
- ・学習しようという思いをもった多数派をつくる。そのために、簡単なことでも「いつもできている」ことのすばらしさに目を向けさせるようにする。



クラス全体に聞こえる声で、話すことができましたね。

いつもみんなに聞こえる声で話せることはすばらしいことです。

◆生活のきまり

- ・きちんと守れていたことをほめ、きまりを守ることでみんなが楽しく過ごせたことを伝える。
- ・具体的な姿を説明し、ほめる。



廊下を歩いている人の迷惑にならないように、走らずに、歩いて体育館まで行くことができましたね。

しゃべらずにすばやく並ぶことができましたね。

◆遊びのきまり

- ・きちんと守れていたことをほめ、ルールを守ることで楽しく遊べたことにつながったことを伝える。
- ・よくトラブルになる遊びについては、明確なルールを決め、その基準に従ってほめる。明確なルールを示さないと、子どもたちは自分の基準で判断し話し合うため、水かけ論になってしまうことが多い。



友だちのことを考えて、きちんと順番を守って遊べていましたね。

この間決めたドッジボールのルールをみんなが守っていたので、楽しく遊べましたね。

2. 「挨拶や返事」ができたとき

挨拶は、コミュニケーションの始まりといってもいいでしょう。そして、返事は、相手の思いに応える大切なコミュニケーションです。挨拶や返事は、教師が常に意識をして指導していかないと子どもたちに定着させていくことは難しいと思います。できていないと怒ると、その場ではできるかもしれませんが、しかし、長続きはしないでしょう。また、できてきたからといって油断していると、いつの間にかできなくなっているということもあります。できたときにほめることで、常に挨拶や返事をするを意識させることが大切です。「挨拶や返事」に関してほめる機会はいたる所にあるといえます。チャンスを見逃さず積極的にほめましょう。

- ・教師から挨拶をし、ほめるチャンスを増やす。
- ・配付物を手渡すときにも、声をかける。
- ・朝の会・帰りの会などで、挨拶や返事が人間関係を円滑にすることを伝える。

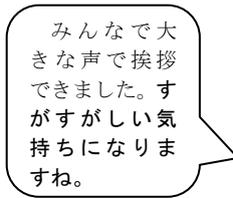


◇登校時



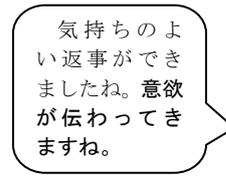
朝から気持ちのよい挨拶ができましたね。

◇朝の会など



みんなで大きな声で挨拶できました。すがすがしい気持ちになりますね。

◇学習中



気持ちのよい返事ができましたね。意欲が伝わってきますね。

3. 「話を聞く」ことができたとき

「話を聞く」ということは、ただ、声や音を聞くということだけでなく、相手の考えや思いを受け止めようとすることです。これができなければよりよい人間関係をつくっていくことはできません。そのため、「しっかりと内容が聞けていること」と同時に、「姿勢・態度」をほめることが大切です。じっくりと段階を追って指導しましょう。

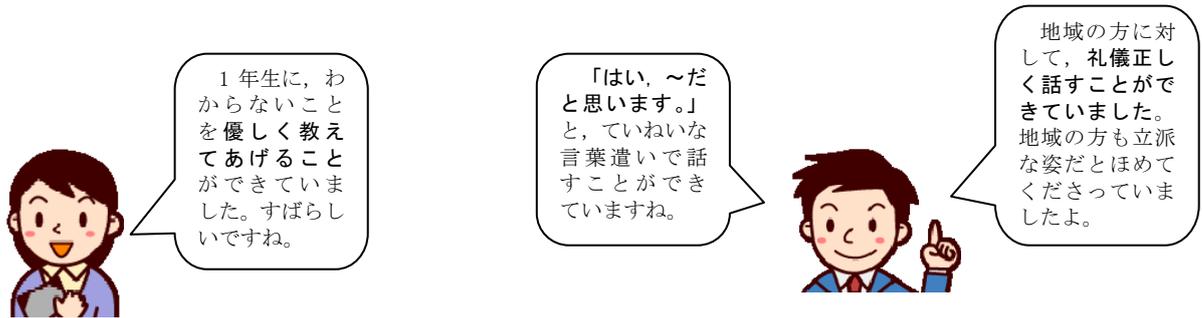
- ・姿勢を正して聞けていたらほめる。(相手を見ている、背筋を伸ばしているなど)
- ・相手が話しやすい態度で聞けていたらほめる。(頷く、笑顔など)
- ・「姿勢・態度」を正すことは、「一生懸命話そうとする気持ちに応えること」であることを伝える。
- ・相手の思いや考えを受け止められていたらほめる。(質問や意見を返したとき)



4. 「言葉の遣い方」に気をつけられたとき

言葉はコミュニケーションをとる上で欠かせないものです。そして、言葉には、その言葉を遣った人の心が表れます。前向きな言葉を使っていれば、気持ちも前向きになってくるでしょう。また、言葉一つで人の気持ちが温かくなることもあります。このように言葉を大切に、相手の気持ちを考え、わかりやすく話したり、ていねいに話したりする姿が見られたら積極的にほめましょう。

- ・ ていねいな話し方をほめる。
- ・ 優しい言葉かけをほめる。
- ・ ときと場をわきまえて言葉を使っているときにほめる。初めは、授業中の話し方の型を示し、それを意識して話せるようにしていくことが必要。
- ・ 礼儀をわきまえた話し方をほめる。



5. 「思いやり」が見られたとき

規範意識を育てるには、他者の存在を感じ、人を大切にしようとする心が原動力になります。思いやりの姿は、人を大切にしようとする心が行動として表れたものです。ですから思いやりの姿が見られたときは、どんどんほめていくことが大切です。しかし、知っておかなければならないのは、目立たないところで思いやりを見せている子どもが多くいることです。「落とし物をそっと拾って机に置く姿」や「何も言わずごみを拾って捨てる姿」など、目立たないことにも目を向けていくことが大切です。そのためには、日頃からクラスの子どもたちの様子を見てメモしておくなどの習慣をつけておくことが必要でしょう。

- ・ 友だちに優しく接している姿をほめる。
- ・ 困っている子、寂しい思いをしている子に寄り添う姿をほめる。
- ・ 日頃の姿をよく観察し、さりげなく行われている思いやりに気づき、ほめる。



6. 「助け合い」ができたとき

個人で過ごす時間がどんどん多くなり、人間関係が希薄になってきています。子どもたちにとって、「助け合う場」があるのは、もしかしたら学校の中だけということもあるかもしれません。

人と人とがともに集団生活を送っていく中で、「助け合い」はなくてはならないものです。子どもた

中には「助けたい」「人の役に立ちたい」という思いが生まれもって備わっています。その「助け合い」の心が隠れてしまわないように、その姿をいつでも認め、ほめることで、「助け合い」の心のすばらしさを感じさせていきたいものです。

- ・友だちと仲良く活動する姿をほめる。
- ・班などのグループで活動できたときにほめる。
- ・助け合うことの素晴らしさを伝える。

男の子も女の子も協力して活動することができましたね。

助け合うことで、一人ではできないことができたり、一人では味わうことのできない喜びを感じたりすることができます。



7. 「感謝」している様子が見られたとき

「だれかに支えられているから生きていくことができる」という思いをもつことは、人が生きていく上で大切にしていかなければならないことです。その感謝の心が、「人の役に立ちたい」という思いや、みんなに迷惑をかけないために、その集団の規範を守っていこうという思いにつながります。何でも簡単に手に入る便利な世の中で、ともすれば自分一人でも生きていけると錯覚するような時代でもあります。しかし、人は一人では生きていけません。だれかの支えや助けがあって生きていけるのです。日頃お世話になっている人々の存在に気がつけるよう支援し、感謝の気持ちを言葉で伝えられるようにしていくことが大切です。

- ・「ありがとう。」「いただきます。」などの感謝の言葉をほめる。
- ・教師も「ありがとう。」と感謝を伝える。
- ・感謝の気持ちを伝えられた人の思いを伝える。

「ありがとう。」っていい言葉ですね。してもらったことに感謝の気持ちを伝えることは大切なことです。



「ありがとう。」と言ってもらえるととても温かい気持ちになります。先生も、もっと「ありがとう。」と言ってもらえるようにがんばろうと思いました。

「当たり前」を続けられることが素晴らしい！

日常の場面の中で、ほめることはたくさんあります。上に挙げた1～7は、規範意識を育てる上で、特に意識したいものです。学年当初は、教師も意識しているので積極的にほめますが、だんだんと意識も薄れ、「最近あんまりほめていないなあ」ということも出てきます。また、時間が経つにつれ、ほめていた行動がいつの間にか教師の中で当たり前になってきます。「できていることが当たり前」の状態になることは非常に望ましいことですが、それを基準に、できていなければ叱るということがないようにしなければなりません。「いつでもできているって素晴らしいことだね。」と継続できていることをほめたいものです。学級経営案を立てるときに、クラスをつくる上で大切にしたいことを明確にし、基準をつくっておくことで、一貫したほめ方ができるのではないのでしょうか。

【ほめて規範意識を高める】

規範意識を高めるということは、次の二点であると考えます。一点目は、「盗んではいけない」「人を傷つけてはいけない」といった最低限の規範を守るだけでなく、生活をよりよくしていくための規範を積極的に取り入れていくということです。二点目は、「叱られるから」とか「みんなに認めてもらえなくなるから」という他律的な考えから、自分自身の意志で行動していく自律的な考えに高めていくということです。

規範意識を高めるためには、一人一人の子どもが責任感をもつように働きかけなければなりません。「決めたことは守ろう」「任された仕事は最後までやりきろう」という責任感が規範意識を自律的なものへと高め、様々な規範を取り入れていこうとする力になっていくからです。子どもたちに任せる場面を増やし、責任をもって行動できたことを、結果にかかわらずほめていくことが大事になるでしょう。このことは、よりよい生活を築いていこうという子どもたちの意欲を引き出し、進んで規範を守っていこうとする姿を育てていくことにつながります。

1. 努力している姿をほめる

決めたことを継続して守る姿や自分に求められていることに答えようと努力している姿を認め、ほめていくことが大切です。よくなかったところを改善しようと努めている姿も見逃さずほめていきたいですね。



いつも決めたことを守って行動しようと努力できていますね。

2. 進んで行動している姿をほめる

進んで行動した姿をほめましょう。決められたことでもやり始めるには時間がかかります。自分のやりたいことが優先されたり、逆に、めんどろなことから後回しにしたりするものです。「掃除時間にきちんと掃除を始める姿」や「落ちているごみを拾って捨てる姿」など、めんどろなことや人がやりたがらないことを進んでできる姿を、見逃さずほめていくことが大切です。いつでも正しいと思う行動ができる誠実さを伸ばしていくことが、規範意識を高めることにつながります。



今日は教室にごみが落ちていないね。だれかが拾ってくれたのですね。ありがとうございます。人が見えないところでも、進んでよい行いができるのは、心が強い証拠ですね。

3. 自分で考えて行動している姿をほめる

だれかの指示を待つのではなく、自分で考えて行動できたときに、ほめることが大切です。自分で判断する力がつけば、何が必要か考え、適切に行動することができるようになります。そうなれば、規範意識を自律的なものへと高めていくことができます。「チャイムが鳴ったら座ることができた」「先生が来るまでに運動場に並んで待つことができた」など、小さなことでもよいから、自分で考えて行動した姿をほめましょう。



先生が何も言わなくても、ラインサッカーの準備をして、整列して待つことができるなんて素晴らしいですね。これで活動の時間も増えて、楽しく活動できますね。

4. 責任のある行動ができている姿をほめる

一つ一つの行動に責任もてる子に育てることが、規範意識を高めていくことにつながります。決められたことはやろうという気持ち、きまりや約束を守ろうとする力になります。また、できなかったときや失敗してしまったときに、素直に認めることも責任のある行動といえます。「だめだったな」と自分の行動を振り返ることができる姿を認めていくことも大切です。



やるべきことができなかったときに、「ごめんなさい。」と反省できることも責任のある行動です。次に期待していますよ。

規範意識を高めるためには

規範意識を高めていくということは、子どもたちの自治能力を高めていくことにつながります。規範意識の高い子どもがクラスにより影響を与えるといった研究成果が挙げられているのも、自分たちの生活をよりよいものにしようという意欲が高いことからきています。

また、与えられたルールよりも、自分たちでつくったルールのほうが「守らなければ」という意識が強くなるという研究結果もあります。このことを考えると、教師は、教示的な姿勢から、委任的な姿勢へと変化させていくことが、子どもたちの規範意識を高めていく上で有効であることがわかります。子どもたちを信頼し、任せていくことが大切です。そして、積極的に行動する姿、責任をもって行動する姿を認め、ほめたいものですね。

【より効果的にほめるために】

同じほめるにしても、「だれがほめるのか」「いつほめるのか」「どこでほめるのか」「どのようにしてほめるのか」を変えることで、子どもへの届き方も変わってきます。それぞれどのようなメリットがあるか考えておくことも大切です。

だれが	いつ	どこで	どのようにして
<input type="checkbox"/> 担任が <input type="checkbox"/> 教職員が <input type="checkbox"/> 保護者が <input type="checkbox"/> 友だちが	<input type="checkbox"/> そのときに <input type="checkbox"/> しばらくしてから <input type="checkbox"/> その日の帰りの会で <input type="checkbox"/> 次の日の朝の会で <input type="checkbox"/> 同じようなことがあったとき <input type="checkbox"/> 叱った後	<input type="checkbox"/> その場で <input type="checkbox"/> 教室で <input type="checkbox"/> 個別に呼んで <input type="checkbox"/> みんなの前で	<input type="checkbox"/> 励ます気持ちで <input type="checkbox"/> 感謝の気持ちで <input type="checkbox"/> 自分が受けた影響を伝えて <input type="checkbox"/> 笑顔で <input type="checkbox"/> 身振り手振りで <input type="checkbox"/> 大げさに <input type="checkbox"/> さりげなく <input type="checkbox"/> 側に行って <input type="checkbox"/> 顔を見て <input type="checkbox"/> 名前を出して <input type="checkbox"/> 匿名で <input type="checkbox"/> 学級通信などで <input type="checkbox"/> 日記で <input type="checkbox"/> ノートで <input type="checkbox"/> カードで

だれが Who

1. 担任が

やはり、学校で一番身近な大人である担任にほめられる、認められることは、子どもたちにとってうれしいことでしょう。担任がほめることは、基本中の基本です。

2. 教職員が

様々な教職員の方にほめてもらうことで、子どもは学校全体で見守ってくれているのだと感ずることが出来ます。担任とは違う視点でほめてもらうことで、子どもも新鮮な気持ちで言葉を受け止めることができるのではないのでしょうか。また、「担任の先生がほめていたよ。」と人から伝え聞くと、直接ほめられるよりうれしく感ずることもあります。

3. 保護者が

年齢が幼いほど、親から認められたいという気持ちは強くなります。学校であったことを伝え、親からほめてもらうこともよいのではないのでしょうか。学校から連絡をするときは、いつも「悪い知らせ」ではなく、良いことも積極的に保護者に伝えていくことが大切です。保護者が子どもをほめる機会も増え、「最近叱ってばかりです。」という保護者の気持ちもやわらぐでしょう。

4. 友だちが

友だちがほめることで、学級内での人間関係が良くなっていきます。評価する（される）といった関係ではないので、言われた子どもがほめられたことを素直に受け取ることが出来ます。「よいところ見つけ」など、友だち同士でほめ合う機会をつくりたいですね。

いつ When

1. そのときに

よい行いを見かけたときに、すぐほめるのは基本です。いつも、子どもたちの様子をよく観察し、積極的にほめていきたいものですね。

2. しばらくしてから

その場でほめることができないときは、忘れずに機会を見つけてほめるとよいでしょう。時間をおいてからほめられると、「先生は、自分のことを見てくれていたんだ」と、いつも見守ってくれているという安心感を与え、すぐにほめるときと同じ位うれしく感ずることがあるようです。

3. その日の帰りの会で

全体の場でほめることで、クラス全体の共通理解を図ることが出来ます。他の子どもも「自分もやってみよう」という意欲が湧いてくるのではないのでしょうか。みんなの前でほめられることで、自信をもつことができ、周りの子の、その子への見方も変わってきます。しかし、名前を出すことがいつも良いとは限りません。特に高学年になってくると、人前でほめられることに抵抗のある子どももいるので注意が必要です。また、帰りの会などで、積極的に良いところをほめることで、良い雰囲気をつくって1日を終えることが出来ます。

4. 次の日の朝の会で

全体の場でほめるということについては、帰りの会と同じ効果が期待できます。

朝の会でほめることによって、1日のスタートが気持ちの良いものになります。その日、ほめられたことを実行しようとする子どもも増えるのではないのでしょうか。

5. 同じようなことがあったとき

同じようなことがあるということは、継続して行うことができているということです。その時々でほめるだけではなく、「前もそうだったけど」と今までのこととつないでほめることにより、子どもが「自分のことをしっかり見てくれている」という思いをもつことができます。そして、子どもが自分の良さや成長に気づくことができます。

6. 叱った後

叱られた後は、だれでも苦々しい思いをするものです。その後の様子をよく観察して、改善されていたら、すかさずほめるようにしましょう。叱りっぱなしでは、その子どもの成長のために叱ったことにはなりません。その後の様子を見守り、変わろうとする努力を認めていく事が大切です。

どこで Where

1. その場で

がんばっている姿を見つけたら、その場ですかさずほめましょう。後でと思っていたら機会を逃すことになることもあります。その場でほめることができないときや、何か意図があって後からというときは、必ずメモを取っておくようにするといいですね。

2. 教室で

教室でほめることは、クラスを温かい雰囲気になります。また、教室でほめるということは、「その行為をすればほめられるのだ」という基準を暗に示すことになります。「あの子はほめられて、自分はほめられなかった」という思いをもたせることがないように、子どもたちをしっかりと見ていくことが必要になります。個人をほめる場合は、その子自身をほめるのではなく、その子のとった行動をほめるようにしましょう。

3. 個別に呼んで

みんなの前でほめられることに抵抗のある子どもは、さりげなく呼んでほめるといいでしょう。その子どもとの信頼関係を築くことにも役立ちます。

4. みんなの前で

みんなの前でほめられることは自信につながります。しかし、みんなの前でほめられたり、大げさにほめられたりすることを嫌がる子どももいます。その子どもがどのような性格の子どもなのかよく考える必要があります。特に高学年では、気をつけておかないと「何であの子だけ」「ひいきをしている」といった感情を引き起こし、トラブルの原因になることもあります。名前を出さずにほめたり、クラス全体のこととしてほめたりするといった配慮も必要でしょう。

どのようにして How

《心構えを考えて》

1. 励ます気持ちで

ほめることは良いことですが、どのようなことでもほめればよいということではありません。ほめたつもりが嫌みになってしまうこともあります。大切なことは、子どもが認めてもらいたいと思っていることやずっと継続して行っていること、もう少しで達成できそうなことを励ます気持ちでほめることです。



いつもいねいに字を書くことができていますね。どんどん字が上手になっていますよ。

2. 感謝の気持ちで

「ありがとう」の気持ちを伝えましょう。子どもは「ありがとう。」と言われることが大好きです。子どもの「役に立ちたい」という思いを大切に、感謝の気持ちをもってほめることで、次もがんばろうという思いをもつことができるでしょう。

ありがとうございます。荷物を運ぶのを手伝ってくれて本当に助かりました。



《話し方を工夫して》

3. 自分が受けた影響を伝えて

「〇〇くんは、がんばっていてすごいね。」ではなく、「がんばる姿を見ると、先生も励まされるな。」というように、自分がどのような影響を受けたか伝える。そうすると、ほめた側の主観的な言葉となるので、暗にだれかと比較しているようなほめ方にならないでしょう。



いつもしっかり挨拶ができていますね。先生も見習って挨拶をがんばるぞ。

4. 笑顔で

子どもにとって、先生が笑顔でいることは一番うれしいものです。もちろん、ほめるときも笑顔でほめて、子どもの心を温めたいものです。顔を見てにこっと笑ってくれるだけでも、子どもは喜ぶものです。

5. 身振り手振りで

気持ちは、言葉だけでなく表情やしぐさからも伝わります。子どもには表面上のほめ言葉は通用しません。うなずきやあいづちを使いながら話を聞いたりすることも、話している子どもを認めていることになります。

6. 大げさに

あまりわざとらしいのはよくないと思いますが、心から喜んでいることを伝えるために、ときには大げさにほめることもよいでしょう。低学年は、些細なことでも先生にたくさん喜んでほしいと思っています。

7. さりげなく

高学年になると、人前でほめられることを恥ずかしがったり、お世辞でほめていると感じたりするようになってきます。さりげなく「ありがとう。」「ご苦労さま。」という言葉伝えるといった工夫も必要になってくるでしょう。自然な形で、感謝されたり、ねぎらいの言葉をかけてもらったりすることはうれしいものです。



後片づけ、ご苦労さま。

8. 側に行って

近くに行くことで、心の距離も縮めることができます。側に行ってほめると親近感が湧きます。

9. 顔を見て

しっかりと顔を見てほめることは、気持ちを伝えるためには大切なことです。顔を見て子どもの思いを受け止めながら、にこやかにほめてあげたいですね。

10. 名前を出して

名前を出してほめることで、自分のことを認めてくれているという安心感をもつことができます。特に低学年では、名前を出さなければ、自分のことを言っていると気づかない子もいます。逆に年齢が高くなってくると、みんなの前でほめられることを嫌がることも出てくるので、注意が必要でしょう。

11. 匿名で

中、高学年になると、名前を出さなくても自分のことをほめてくれているとわかるようになります。人前でほめられることを嫌がる子どもには匿名でほめるほうがよいでしょう。また、匿名でほめることは、その子どもの人格をほめるのではなく、その行動をほめることになります。そうすると、同じような行動をとっていた子どもも認められることになり、その行動がクラスの規範として示されることになります。

《伝え方を工夫して》

12. 学級通信などで

お家の人に伝えることで、子どもは二度ほめられることになります。学校でも家でも同じ価値観をもってほめられることで、子どもの意欲が高まっていくでしょう。家庭での会話が盛り上がることで、「学級通信などで伝える→家でほめられる→意欲がわく→学校でほめられる→学級通信などで伝える」といった、よい循環ができたらいいいですね。

13. 日記で

ほめようと思っけていても、その機会を逃してしまうことはあります。日記のコメントに、ほめ忘れていたことを書けば、子どもは嬉しいし、日記が教師と子どものよいコミュニケーションツールになります。

14. ノートで

学習のノートにコメントを入れるときに、学習の評価だけでなく、一言ほめ言葉を添えておくことで、子どもは意欲を高めることができます。

15. カードで

言葉かけだけでなく、形として残るものを渡されるのは嬉しいものです。場合によっては、そのカードが子どもの一生の宝物になることもあるでしょう。毎日、全員にという無理がありますが、一日一人ずつ渡していくという目標をつくると、子どもたちのよいところに目が向くようになり、クラスの雰囲気はよくなっていくのではないのでしょうか。また、子ども同士で「よいところ見つけ」をして、カードに書いて渡すという時間をつくるのも素敵ですね。

【叱り方 三つのポイント】

- ① 人間性を否定しないように具体的に叱る
- ② 一貫性をもって叱る
- ③ 成長をうながすために叱る

できれば叱りたくないものですが、子どもたちがよりよい成長をしていくために、叱ることも重要です。それは、子どもたち自身もわかっていて、よくないことをしたらきちんと叱ってほしいと思っています。

います。子どもだけでなく、大人もそうですが、自分が悪いことをしていると気づいていないときもあります。ときには悪いとわかっていてもしてしまい、それを自分で止めることができず、だれかに止めてほしいときもあるのだと思います。そうしたときに的確に叱り、導いてくれる存在が必要になります。しかし、ただ叱ればよいというものでもありません。叱り方一つで逆に悪い方へ進ませてしまうこともあるからです。子どもたちをよりよい方向へ導くために、上記のような三つのポイントが大切です。

①人間性を否定しないように叱ることで、子どもの自尊心を傷つけることなく、反省をうながすことができます。人間性を否定した叱り方になると、子どもたちが叱られることを避け、消極的になったり、何について叱られているかわからず、「自分はだめな人間だ」という思いをもたせることになったりします。具体的に、行動や考え方の悪かったところを適切に注意し、どうしたらよいのかわかるように説明することが大切です。

②一貫性をもって叱ることは、子どもとの信頼関係を築いていく上で重要なポイントになります。指導に一貫性がなくなれば、子どもの信頼を失うことにつながります。指導にブレが出れば、「この間はよかったのに、何で今日だけ怒られるの」という思いや、「何で自分だけ怒られるのだろう」という不信感をもたせることになります。叱る内容を一貫しておくことと、相手によって叱ったり、叱らなかつたりということがないようにしなければなりません。

③成長をうながすために叱ることは、叱ることの大前提であるといえます。この意識がなければ、叱ることが教師の機嫌や都合によって左右されることになりかねません。子どもが「先生は自分のことを思って叱ってくれているんだ」という思いをもって初めて、子どもの心に響くものになります。ときには、きつく叱ってしまうこともあるでしょう。ですが、同じような叱り方でも、「成長をうながすため」という意識をいつでももっていれば、子どもにきちんと届くものになるのではないのでしょうか。

【叱って信頼関係を深める】

ある程度の信頼関係がなければ、叱って信頼関係が深まることはありません。叱る前提として、その子どもに信頼されているのか、尊敬されているのかといったことが問題になります。信頼関係を築くことができなければ、叱ることで逆に反発を招くこともあります。同じことを言われても、「この人が言うのなら」とすんなり受け入れることができるのと、逆になんとなく受け入れにくく感じるときがあることを経験したことがないでしょうか。これは、叱られる人間と叱る人間との信頼度によるものです。しっかりとした信頼関係を基盤とすることで、「叱る」ということが生きてきます。適切に叱ることができれば、今以上に信頼関係を深めていくことができます。

- ・ 人間性を否定しないよう具体的に叱る。



「めんどくさい」「やりたくない」という言葉は、聞いている人のやる気もなくす言葉です。言わないようにしましょう。

きちんと並べなければ、みんなに迷惑がかかります。すばやく、列が乱れないように並びましょう。



- ・ 一貫性をもって叱る。

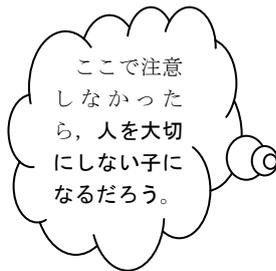


いつも同じ子ばかり叱っていないかな。自分の機嫌に左右された叱り方になっていないかな。



絶対に許してはいけないことを決めておこう。①命を大切にしないこと、②いじめやいじめにつながることを。この二つは絶対に譲らないようにしましょう。

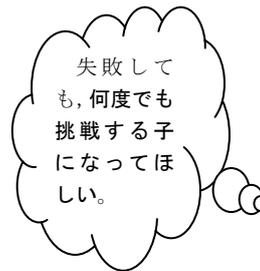
- ・ 成長をうながすために叱る。



ここで注意しなかったら、人を大切にしない子になるだろう。



人の話は、顔を見て聞きましょう。



失敗しても、何度でも挑戦する子になってほしい。



失敗することはだれにでもあります。大切なのは、その後どう考え、どう行動するかです。

信頼関係ができるまで叱ってはいけないの？

信頼関係を基盤にすることで「叱る」ことが生きてくると書きました。では、信頼関係ができていないときは叱ってはいけないのでしょうか。本来ならば、先にも述べたように、子どもとしっかりと人間関係をつくってから叱ることがベストです。しかし、学級担任をしていればそうも言っていないでしょう。学年当初から、叱らなければならない状況が数々出てくる可能性はあります。そのときに、しっかりと指導することができなければ、後々、学級崩壊につながっていくことにもなりかねません。信頼関係ができていなくても、叱らなくてはいけないときには、叱ることが重要です。

信頼関係ができていないときに叱るためのポイントは、「叱られても仕方ない」と思える状況に子どもをおくことです。そのために、年度初めに、必ず子どもたちに「どのようなことをしたら叱るのか」を宣言し、一線を引いておくことが大切です。そして、なぜ叱るのか、納得できる理由を用意し、しっかり説明しておきます。そのことで、子どもたちはその線からはみ出した行動をとったとき、叱られても仕方がないという状況になります。このような状況におかれることで、子どもは納得することができるでしょう。

【叱って規範意識を育てる】

規範が守れていないときは、小さなことでも見逃さず叱っていくことが大切です。いつでも声を大きくして叱る必要はありません。叱るといっても様々です。「これは許すことができない」と声を荒げて叱ることが必要なときもあれば、できていないことを指摘するだけというときもあります。「これぐらいなら」と許していくと、後で取り返しのつかないことになります。小さなことなら指摘するだけでよいのです。初めのうちから、見逃さずに注意していけば、笑顔で指摘するだけで、子どもは直すことができるでしょう。また、気分が左右されることなく一貫して叱ることが大切です。

いつでも叱る基準を一定にしておくことで、子どもは、「こういう行動をしたときは叱られる」と感じることができるようになります。叱る基準を一定にしておくことで、きまりを明文化する必要がなく、学級の雰囲気としてその規範が根づいていくでしょう。

1. 「きまりやルール」を守れなかったとき

きまりやルールは、集団生活を円滑にしていくために必要なものです。意識して守っていかなければなりません。学級で明文化しているきまりやルールについては、常に意識しておく必要があります。ルールはつくったが、その後、守れていなくても、そのまましておけば、ルールはなし崩しになってしまいます。守ることができていないときは、叱らなければなりません。先生が守られていない状況を見て見ぬふりをすれば、まじめに守っている子どもに不満がたまります。その不満が、やがて先生に対する不信感に変わるでしょう。きまりやルールを守ることは、「友だちを大切にすることなんだ。」と話し、根気強く、守ることができるように指導していきたいですね。

◆学習規律

- ・年度始めに、学習についてのルールを明確に示しておく。
- ・示したルールはいつも意識できるように声かけをする。できていなければ注意をする。できていないまま放っておけばやらなくてもよいという雰囲気が学級に蔓延することになる。初めの対応が肝心である。
- ・ルールを追加するときは追加することを説明してから叱る。
- ・黙って待つということも叱ることになる。

静かにできるまで待ちます。



みんながたくさん発表できるようになってきたので、さらに成長するために、発表するときの声の大きさを考えて話すようにしましょう。これからできていなかったら注意していくよ。

◆生活のきまり

- ・学校で決まっているルールや、集団で生活するためのルールが多いため、初めは教師が示すことが重要である。給食時間や掃除時間などのきまりは、ていねいに指導することで、学級生活を円滑に進めることにつながる。
- ・なぜいけないのかという理由をはっきりさせて叱る。
- ・整理整頓など、細かいことに注意を払っておくことで、大きな荒れを防ぐことにつながる。

机の中は、きちんと整理整頓ができていますか。ものの乱れは、心の乱れにつながります。落ち着いて生活できるよう、きちんと整理整頓しましょう。



給食を食べ終わったら、立ち歩かないで、すわって待ちましょう。読書などをして待っていたらよいですよ。

◆遊びのきまり

- ・ルールを守れなかったときは、その場で注意をする。ルールが守られなければ、安全に楽しく遊ぶことができなくなることを伝える。
- ・ルールがわかっていなければ、次からどのように行動したらよいか、一緒に考えたり、伝えたりする。
- ・同じ遊びでも、幼稚園や保育園が違ったりすると、ルールが違う場合がある。そのようなときは、クラスで話し合い、共通理解することが大切である。

ボールはきちんと片づけよう。そうしたら次に使う人が困らないよ。

この間つくったドッジボールのルールを守ってやりましょう。新しく困ったことが出てきたら、そのときはまたみんなで話し合いましょう。



2. 気持ちのよい「挨拶や返事」ができていないとき

挨拶は人と人とのコミュニケーションの始まりともいえます。きちんと挨拶をするということは、他者意識を育てることにもなります。挨拶はルールというより、マナーやモラルといった側面が強いので、できないからといってきつく叱る必要はありません。できていないことを伝え、できるようにうながしていきましょう。定着させるためには、粘り強く指導をしていかなければなりません。教師の粘り強い姿勢が、挨拶や返事を定着させるカギとなるでしょう。

- ・顔を見て挨拶ができるように指導する。
- ・全員での挨拶は他人任せにならないように指導する。
- ・呼ばれたら必ず返事をするように注意する。

返事をしてもらえないとやはり嫌な気持ちになります。しっかりと返事しましょう。



3. 「話を聞くこと」ができなかったとき

他者意識を育てていく上で重要なのは、相手の話に耳を傾けることです。しっかり耳を傾け、相手の考えや思いを受け止めようとする姿がなければ、よりよい人間関係をつくっていくことはできません。また、人の話を聞く態度が育っていなければ、授業も成立しなくなります。集団の中において個を尊重していくためには、話を聞くということは絶対条件になります。「話を聞くこと」は、授業中に限らず学校生活の様々な場面で指導していくことが重要です。

- ・顔を見て聞けるように指導する。
- ・話に対して何らかの反応ができるように指導する。
- ・相手の思いを受け止めながら聴けるように指導する。

人前で発表することは勇気のいることです。その頑張りにも、しっかり顔を見て、聞くことで応えてあげましょう。



4. 「言葉の遣い方」に気がつけられなかったとき

ていねいな言葉を遣うということは相手を尊重することにつながります。ときと場をわきまえた言葉を遣えるように指導していきたいものです。また、言葉は遣い方によって、相手を救うものにもなれば、相手を傷つける道具にもなります。人権を無視した言葉は、徹底して指導していかなければなりません。子どもたちが相手を意識した、思いやった言葉づかいができるように、教師自身も模範となれるよう意識していく必要があるでしょう。

- ・授業中と休み時間と区別して話せるように指導する。
- ・「さん」「くん」をつけて話せるように指導する。
- ・ていねいな言葉で話せるように指導する。
- ・人を傷つける言葉を遣ったときは、厳しく叱る。

顔や体つきのこと
は言ってはいけ
ません！



ていねいな言
葉で話しましょ
う。ていねいな言
葉で話すことは
相手を大切にす
るということです。

5. 「思いやり」の気持ちを忘れて、人を嫌な気持ちにさせたとき

思いやりを忘れ、人に嫌な気持ちを与える行動を繰り返せば、それは、いつかいじめにつながります。いじめやいじめにつながる行為がまかり通っている学級で、規範意識など育つわけがありません。いじめやいじめにつながる行為は厳しく叱っていきましょう。どのような理由があろうとも絶対に許してはいけません。そのためには小さな兆候も見逃さないことが大切です。

- ・人の気持ちを考え、温かみのある行動ができるように指導する。
- ・いじめやいじめにつながる行動をとったときは、毅然とした態度で叱る。

教室の中
でひそひそ
話はやめな
さい。



今の一言で、
友だちがどれ
だけ傷つか
考えなさい。

6. 「助け合い」ができなかったとき

助け合うことがなく、個が「孤」になってしまったとき、集団はただの「群れ」となってしまいうでしょう。人は助け合わなければ生きていくことはできません。しかし、社会の風潮として自分がどう成功するかばかりを求めたり、家庭での躰においても、個人の成長のみに重きがおかれたりする傾向があります。「自分さえよければよい」ではなく、助け合うことの大切さに改めて気づくことができるように、注意をうながしていきましょう。

- ・みんなと協力することができるように指導する。
- ・人によって態度を変えることがないように指導する。
- ・困っている人を放っておくことがないように指導する。



自分さえよければそ
れでいいのですか。ク
ラスの一人一人がそん
な行動をとったら、ク
ラスがばらばらになっ
てしまいますよ。

7. 「感謝」の気持ちを忘れているとき

「やってもらって当たり前」といった風潮が世の中に蔓延しているのではないかと感じる場合があります。親の目が行き届きすぎて過保護になると、子どもたちも、何でも「やってもらって当たり前」という意識が強くなるように思われます。「やってもらって当たり前」という考えになると、自己中心的な考え方になり、「人の役に立つために」という自己有用感をもつことができなくなってしまいます。当たり前ではなく、自分が元気で過ごせているのはいろいろな人の支えや助けがあることに気づかせ、感謝の気持ちをもつことができるようにすることが大切です。

- ・「ありがとう。」と言えるように指導する。
- ・「いただきます。」「ごちそうさま。」と言えるように指導する。

何かしてもら
ったら、「ありが
とう。」って言お
う。



「いただきます。」
は、命をいただいて生
きるができている
ことに感謝。「ごちそう
さま。」は、つくって
くれた人に感謝です。

「なぜ叱るのか」が子どもたちに伝わるように

学級の状態によって、学級の方針を変えていかなければならないことが出てきます。方針を厳しくするときには、子どもたちに厳しくすることを説明しておくことが大切です。今までなら注意されなかったことが、いきなり注意されると、子どもは、「なぜ急に怒るようになったのだろう」と不信感を抱くことがあります。突然厳しくするのではなく、きちんと「このままでは、いけない」という思いや「このことを今がんばらなくてはならないんだ」という担任の思いを伝えていくことが大切でしょう。

また、叱られてばかりになると、子どもたちは話を聞かなくなったり、自信を失ったりします。そうなれば、規範意識を育てるどころではありません。だから、あまり小言にならないように、ポイントを絞って注意したり、叱ったりしていくことが大切です。また、叱って終わりではなく、叱った後の行動をよく見守ることも大切です。改善しようとする姿が見られたら、そのことをしっかりと評価しましょう。そうすれば、「自分の成長のために言ってくれたんだ」と子どもは気づくことができます。また、普段から子どもの良さを見つけておくことも重要です。いつも認めてくれている先生だからこそ、叱られたことを素直に聞こうとするのです。

【叱って規範意識を高める】

規範意識を高めていくためには、他律的な考えを自律的な考えにしていかななくてはなりません。まずは、学級という集団の中に自分がいることを感じ、みんなとつながっているんだという思いをもたせることが大切です。そして、他者とのつながりの中で、自分に対して期待されていることに応えようとする責任感をもたせたいものです。そのためには、自分に関係ないといった態度や、友だちをないがしろにするような発言や行動に対しては、厳しく叱っていかなければなりません。責任感のある行動がみんなのためになるという実感をもたせ、子どもが自分への信頼は簡単に裏切ってはいけないと思えるような指導を心がけたいですね。

1. 人任せになっているとき

集団で行動するときに見られることとして、「だれかがやってくれるだろう」と人任せにする姿があります。これは、責任の所在がわかりにくいときに、だれにでも働く心理だといえるでしょう。しかし、このような姿を指摘していかなければ、他律的な姿勢から抜け出すことはできません。だれかが見ている、見ていないに関係なく、クラスをよりよくするために、自分の行動に責任がもてるように指導することが必要です。オーケストラの場合、一人でもいい加減にすればよい演奏にならないように、クラスの場合でも、一人一人が自分の役割を果たすことができなければよいクラスにはなりません。一人一人が責任をもって、自分の役割を果たせるように声をかけていきたいですね。



怒られなければ
やらなくていいの
かな。一人一人が
がんばろうと思う
からクラスがよりよ
くなっていくので
はないのかな。

2. 投げやりな態度が見られたとき

最後まで粘り強くやり通す力をつけていかなければ、成長していくことは難しいでしょう。しかし、自分を律して努力をするということが難しいときもあります。大人でも同じでしょう。何か物事に取り組んでいるときに、途中でやめたくなくなってしまったり、もういいかと思ってしまうことはあります。そのようなときに、「最後までやり通そう。」と背中を押す一声をかけてあげたいものです。



いい加減にすればするほどおもしろくなくなるよ。何でも一生懸命やるから楽しくなるのです。

3. 責任逃れをしようとしたとき

子どもたちに、自分で責任をとるということを教えていかなければなりません。自分のやったことに責任をもつことができなければ、約束やきまりを破ったときにも言い訳をして逃れようとするでしょう。子どもが責任を取るというということは、「何か物を壊してしまったときに弁償する」というようなことではなく、「自分のしてしまった過ちを素直に認め、謝る」ということです。そして、これからどう行動していくか考えるということです。言い訳をして逃れようとしたときは、自分の行いを見つめ直させ、次にどうしていけばよいか考えられるように指導することが大切です。

人のせいにしてるけど、本当にきみは悪くないのかな。
自分の悪かったところは素直に認めることが大切だよ。認めてどうすればいいか考えるから、成長していけるのです。



4. うそをついたとき

うそがまかり通れば、約束や決まりといった規範は意味を失ってしまいます。きまりや約束を破ったことよりも、うそをついて責任を逃れようとするのを、厳しく叱っていかねばなりません。教師はうそを見逃さないという姿勢を常にもっておく必要があります。簡単にうそをつく子どもに育ててはいけません。

子どもを信じることがいけないではありません。子どもの言うことを鵜呑みにしないということです。子どもは、怒られまいと目先の快にとらわれ、うそをつくときがあります。しかし、それを正していかなければ、子どものよりよい成長は望めないでしょう。

うそをつくということは、その人の信じる気持ちを裏切ることになります。それだけでなく自分自身の心も曇らせることになります。うそをついてもだれも幸せになりません。だからうそはついてはいけません。



活発な係活動が所属感や責任感を高める

規範意識を育て、高めていくためには、「みんなが楽しくなるために約束を守ろう」「自分が約束を守ることでクラスがよりよくなる」という思いをもてるようにしていくことが必要になります。このような思いを育てるのに有効な取組が係活動です。クラスを楽しくするために、友だちと協力して活動する中で、所属感や責任感が育まれていきます。係活動が活発なクラスは、学級の雰囲気もよくなり、そのクラスの雰囲気を守ろうと規範意識も高まっていきます。ですから、活動が停滞しているのであれば、子どもたちの主体的な活動とはいえ、意欲的に取り組めるように声かけをしていくことが大切でしょう。子どもたちが、「やるぞ」と思える指導ができるといいですね。

【より効果的に叱るために】

どれだけその子どもにとって大切な話であっても、本人が聞こうとしなければいくら叱っても効果はないでしょう。子どもが素直に叱られたことを受け止められるように、工夫することが必要です。

だれが	いつ	どこで	どのようにして
<input type="checkbox"/> 担任が <input type="checkbox"/> 教職員が <input type="checkbox"/> 保護者が <input type="checkbox"/> 友だちが	<input type="checkbox"/> そのときに <input type="checkbox"/> 一人になったとき <input type="checkbox"/> 放課後 <input type="checkbox"/> 機会を設けて	<input type="checkbox"/> 教室で <input type="checkbox"/> 廊下で <input type="checkbox"/> 別の教室で <input type="checkbox"/> みんなの前で	<input type="checkbox"/> 相手の気持ちを伝えながら <input type="checkbox"/> 語りかけるように <input type="checkbox"/> あっさり&端的に <input type="checkbox"/> 沈黙を入れて <input type="checkbox"/> 自分の思いとして <input type="checkbox"/> 肯定的な言葉を遣って <input type="checkbox"/> 理由をつけて <input type="checkbox"/> 子どもの気づきを大切に <input type="checkbox"/> 自尊感情を傷つけないように <input type="checkbox"/> じっくり待つ <input type="checkbox"/> 言うべきことははっきりと <input type="checkbox"/> 事実を確認して <input type="checkbox"/> 次のようにしたらよいかわかるように <input type="checkbox"/> よいところを認めながら <input type="checkbox"/> 心に届くように

だれが Who

1. 担任が

学校で一番子どもたちのことを知っている担任が、ここぞというときにびしっと叱ることが大切でしょう。「だめなことはだめ」と叱らなければ、クラスはまとまりません。

2. 教職員が

気づいたときに気づいた教職員が叱ることが大切です。学校全体でどのような子どもに育てて欲しいか示すことができます。問題が頻発するときには、担任以外の教職員に違う視点で話をしてもらうことで、子どもたちが素直に聞ける場合もあるでしょう。

3. 保護者が

子どもが一番の信頼をおく保護者に話をしてもらうことが必要なときもあるでしょう。叱ってもらうというよりも、「何がいけなかったのか」ということをしっかりと語り聞かせてもらうことが大切です。そのことに対して、保護者の方の思いも合わせて話してもらえると、より子どもの心に届くものになるのではないのでしょうか。

4. 友だちが

友だちに注意されることも効果的です。子どもたちは、友だちにどう見られているかということをとても気にするものです。良くないことをしたら注意し合える教室環境を整えていきたいですね。教師がいつも注意するのではなく、周りの子たちがどう思ったか聞いていくことで、注意をうながし、自分を省みることのできる雰囲気をつくることも大切です。ただし、ものの言い方に気をつけることや一人の子どもばかりを注意するといったことがないように配慮する必要があります。



いつ When

1. そのときに

基本はその場で叱る。特に低学年などは後から叱っても、あまり覚えていない場合があります。命を危険にさらす行為は、その場できびしく叱ります。

2. 一人になったとき

たくさんの方がいる前で叱られることで、自尊心を傷つけてしまうことがあります。自尊心が傷つければ、話を聞こうとはしなくなるでしょう。このような可能性がある場合は、一人になったときに話をするのがよいでしょう。

3. 放課後

休み時間などに話をしようと思うと、限られた時間であるため、どうしてもあわただしくなってしまいます。時間をかけて解決しなければならない場合は、じっくりと時間のとれる放課後に話をするのがよいでしょう。ただし、保護者への連絡を忘れてはいけません。連絡するときは、何があったのかという事実関係を整理して話すことが必要です。どのような指導したのかということも必ず連絡をしましょう。

4. 機会を設けて

問題によっては、授業時間であっても話をしなければならないことがあります。学級全体に返したほうがよい問題は、時間をとってみんなで話し合うことが必要です。

どこで Where

1. 教室で

いつも生活している教室は、子どもにとって安心できる場所です。落ち着いて話をするときは教室がよいでしょう。ただし、教室にはたくさんの子どもがいることも考えられるので配慮が必要です。

2. 廊下で

みんなの前で言いにくいことがあるときは、そっと廊下に呼んで話をするのがよいでしょう。ただ、呼び出されたという印象が強く残る子どもがいるので、注意をしなければなりません。

3. 別の教室で

職員室や特別教室などに呼ばれて話をするとき、子どもはとても緊張をします。話をしただけでも怒られたと感じることがあります。大きな問題のときは、「重大なことなんだ」ということを強調するために、別の教室に呼んで話をするのも考えられます。

4. みんなの前で

クラス全体の問題として取り上げたいときに、みんなの前で話をします。学級目標に関わることなどは、クラス全体に返していくことが大切です。このときは、個人名は出さないことが基本です。個人名を出して叱ると、その子どもの人格を否定することになります。



友だちの発表する姿を見て、嫌な笑い方をしている人がいました。これで、本当に学級目標の「思いやり」が達成できるかな？

どのようにして How

1. 相手の気持ちを伝えながら

困っている人の気持ちを伝えることで、自分のとった行動が、周りの人にどのような影響を及ぼしているのかを考えることができます。自分中心に物事を考えていたのが、他者からの視点で考えることができるようになります。

2. 語りかけるように

静かに語ったほうが、子どもたちにとって迫力のある叱り方になります。技術的なことだけでなく、冷静に、子どもに改めてほしいことを語って、言い聞かせたいものです。

3. あっさりと端的に

叱られることはだれにとっても嫌なものです。長々と叱られ続ければ、自然と耳を閉じてしまうでしょう。伝えたいことをあっさりと一言で叱り、後は自分で考えさせる時間をとりましょう。このことをいつも心がけておくことで、他のこともあれこれ叱ることがなくなり、伝えたいことが明確となる叱り方になるでしょう。



4. 沈黙を入れて

立て続けに叱られると、子どもは自分を省みることができなくなります。沈黙を入れることで、子どもたちに考えさせる時間を与えることができます。

5. 自分の思いとして

「みんなも嫌な気持ちになってると思うよ。」「お母さんに叱られるよ。」と他人がどう思うということよりも、「先生は、それはだめだと思う。」と自分の思いとして叱った方が、嫌みがなく、ストレートに叱っている気持ちを伝えることができます。



6. 肯定的な言葉を遣って

掃除をやっていない子に「掃除をサボってはいけません。」と言うよりも、「掃除をしっかりしよう。」と言う方が子どもはやる気という気になるでしょう。肯定的な言葉を遣うことで、子どもたちも先生の言葉を肯定的に受け止められるからです。

7. 理由をつけて

なぜ、そのことが大切なのか、理由をつけて叱ることが大切です。理由をつけて叱ることで「叱られるからやめておこう」という他律的な考え方から、「迷惑がかかるからやめておこう」という自律的な考え方に成長させることができます。

8. 子どもの気づきを大切に

子どもの気づきをうながすために「今そんなことをしていていいのかな。」と問いかけることも必要です。気づきをうながすことで、自分で考えて行動する力が高まります。

9. 自尊感情を傷つけないように

叱ることは、もともとその子を伸ばしたいという気持ちから起こる行動です。人格を否定するような叱り方をして、自尊感情を傷つけてしまえば、次にはがんばろうという意欲はなくなってしまいます。何がいけなかったのかをはっきりさせ、行動を正せるように叱ることが大切です。

10. じっくり待つ

叱った後、すぐに反応がないことで、即座にまた同じことで叱るといったことは避けた方がよいでしょう。子どもは反応するまでに時間がかかることがあります。そして、今やろうとしたそのときに叱ってしまうと、「今やろうとしていたのに」と反発心だけが心に残ります。叱った後はしばらく時間をおくようにしましょう。それでも改善の様子がなければ、そのときにもう一度叱っても遅くはありません。



11. 言うべきことははっきりと

お茶を濁したような叱り方をするのは避けた方がよいでしょう。子どもの気持ちを考えるあまり、ストレートに叱ることができず、回りくどくなることがあります。中途半端に叱るのであれば、叱らないほうがよいということも出てきます。言うべきことははっきりと伝え、叱りきるといった姿勢で臨んだ方が、子どもはすっきりと聞くことができるでしょう。

12. 事実を確認して

事実を確認しないままに、聞いた情報のみで叱ることは危険です。話が伝わってくるうちに誇張されていることもあります。まず、子どもの言い分を聞き、事実を確認してから叱るようにしましょう。うそをついたり、言い訳をしたりする子に対して指導するときは、周りの子どもたちに話を聞き、事実関係をはっきりさせてから指導することが大切です。

13. 次どのようにしたらよいかわかるように

悪いところを指摘するだけでなく、次どうしたらよいかわかるようにすることが大切です。また、「これからどうしたらいいかな。」と問いかけ、考えさせましょう。そして、自分で考えたことを実行できるように支援していきましょう。子どもが自分では考えられないときは、教師の支援が必要です。

14. よいところを認めながら

叱られることが多くなれば、子どもは自信を失い、「どうしたらよいかわからない」という気持ちになることがあります。ただ叱るだけでなく、「ここを直していけば、あなたのもっている良さがもっと輝くものになるよ。」と子どものもつ良さを認め、「その良さを伸ばしていくために、正していくところはないかな。」ということ伝えるようにすることが大切です。

15. 心に届くように

叱るときほど、子どもに愛情をもって接することが大切です。どのような言葉かけをするにしても、温かみがなければ、子どもの心に響かせることはできないでしょう。子どものおかれた立場や背景を踏まえ、「今この子にとって何が大切か」を考え、言葉をかけていきたいですね。

「ほめる」「叱る」のバランスをとって

「ほめる」と「叱る」、どちらがよい指導法かと決めることはできません。どちらも同じように、「子どものよりよい成長をうながすため」という目的があります。子どもの良さをほめることで、「叱る」という指導が生き、叱るべきことは叱ることで、「ほめる」という指導が生きてくると思います。子どもの様子をよく見ながら、その場に応じて、バランスよく指導することが大切です。

最近叱ってばかりというときは、少し見方を変えることが必要です。クラスを見渡せば、必ずほめることがあるはずです。よい行いやがんばれている姿をほめることで、叱らなくても行動が改善されていくこともあります。「悪いことばかりに目が向いてしまっているな」と思ったときは、一呼吸おいて、子どもたちの様子をよく観察しましょう。そうすれば、子どもの良さががんばりにもっと目が向けられるようになるはずです。

教師は子どもたちに大きな影響を与える存在です。「ほめる」ことや「叱る」ことにより、子どもたちに規範を示し、一貫した指導を行い、子どもたちのよりよい成長を支えていきたいですね。



【参考文献】

千葉市教育センター「教師力に関する研究－授業の達人に学ぶ－」2009

天野誠齋「叱り方のいろいろ」『幼児の教育』日本幼稚園協会 1923. 12

柳田泰典『「ほめ方・叱り方」と学級コミュニケーション』『長崎大学教育学部教育科学研究報告 VOL. 55』1998. 6

神谷和宏『教師のほめ方 叱り方コーチング』学陽書房 2007. 7

檜村悌『小学生の叱り方 うまい先生へたな先生』学陽書房 2006. 10

中嶋郁雄『誰でも成功する 児童のほめ方のキーポイント』学陽書房 2005. 3

中嶋郁雄『誰でも成功する 児童の叱り方のキーポイント』学陽書房 2004. 3

「明日の教室」研究会『明日の教室 学級経営・基礎の基礎 子どもに接する・語る』ぎょうせい 2009. 7

河村茂雄編集『集団を育てる学級づくり 12ヶ月』図書文化 2006. 11

教師の技と心研究会『学級経営 MAP』東洋館出版社 2005. 6